

社会主義は理想なのか  
～「共産党宣言」に学ぶ

第12回

関東ブロック

# 社会主義キューバに学ぶ

社会主義は遠い理想ではなく

現実に関われている闘争だ

います。

司会 Ⅱ 「党宣言」学習会も最終回を迎えました。この1年間の締めくくりとして、1959年の革命勝利から現在まで社会主義を貫き通しているキューバの過去、現在、未来を学びたいと思います。今日、講演いただくのは、企画編集委員でもあります富山栄子さんです。

富山 Ⅱ 編集部から依頼があり、来てみたらこんなに多くの熱心な勉強家が社会主義を学んでいることをうれしく思

います。今日はキューバ革命についてお話ししながら最近、新聞でベネズエラのことを取り上げられていますのでどういう視点で読むのか話したいと思います。大事な点は権力一般を見てしまうと判断できません。問題はだれの利益を守る権力なのかということです。商業新聞を見ますとベネズエラの現象面のところが帝国主義の権力側の視点で書かれていることが分かります。インフレ、もの不足、デモの鎮圧、大統領の独裁と書かれています。現象を労働者の側から見ているか、それとも国内大企業

多国籍企業の側から見ているのか、そのどちらの側からなのかでとらえ方が変わります。そこに視点をおきながら話を進めていきたいと思います。

この表題の「社会主義は理想なのか」ということですが、社会主義は単なる理想ではなくて現実に関われている闘争だということです。私たち一人ひとりの毎日の闘い、社会主義的な深い思想、行動と信念を持って人間関係で結ばれた力で闘っている現実です。今、新自由主義の中にあつてこの社会と闘っていることは一つの過程だと思えます。キューバは、米国の経済封鎖



日本・キューバ合作映画。オダギリジョー主演

の下で、とりわけソ連邦消滅以降は「社会主義か、死か」という闘争を闘い抜いてきました。今日は歴史をさかのぼりお話ししたいと思います。

## もう一人の「エルネスト」

今年は、キューバ革命の指導者エルネスト・チェ・ゲバラが1967年に

亡くなって50年を迎えます。『エルネスト』という日本とキューバの合作映画が今年の10月に封切られました。もう一人の映画の主人公のエルネストは日系ポリビア人で、本名はフレデリック・マエムラと言います。彼のギリラ名が、「エルネスト」だったので、日本の映画監督が『エルネスト』という名前で彼の人生を描きました。革命を現実のものとして、生

死がかかった活動としての闘争は、何十年もしないとおおよげに口にする事ができません。

## モンカダ兵営 襲撃の失敗

キューバ革命のスタートはどうだったのかという、本誌9月号

「モンカダ兵営襲撃64周年」キューバ革命は続く」にも書きましたが、1952年、クーデターでバチスタという大統領が地位につきました。この独裁政権を打倒しようとして、フィデル・カストロ（当時26歳）が仲間を120人あまり集めて、カーニバルの騒ぎに紛れて国軍の兵営を襲撃しました。けれども軍事的には全く失敗して全員が殺されるか逮捕されました。フィデル・カストロも捕まりました。蜂起は失敗したわけですが、国内で反独裁闘争、カストロ釈放運動が広まり、フィデルたちは国外追放となり、メキシコへ行きました。

## カストロとゲバラとの出会い

一方、グアテマラでは1950年代に進歩的政権が誕生していました。この国はバナナ共和国とも言われるほど、米ユニテッドフルーツ社が農民から

土地を奪って大きなプランテーションをつくってバナナを輸出していました。アルベンス大統領は、ユナイテッドフルーツ社が所有していた土地のうち耕していない休耕地を土地の無い農民に配る政策をとりました。そのため1954年に米軍事進攻をうけました。

当時、アルベンス政権の進歩的政策に共鳴して、中南米から多くの青年がグアテマラに集まっていました。ゲバラもその一人で医者として働いていました。政権が倒されて大統領は国外追放になりました。そのときゲバラたち青年も国外追放になりメキシコに行きました。

フィデル・カストロもメキシコに亡命していました。そこで二人は知り合い、同志になりました。フィデル・カストロたちがキューバに戻る際、ゲバラも加わり、小型船に82人が乗り込みました。その船の名が「グランマ」(グランドマザー)おばあちゃんとい

う意味)で、今はキューバ共産党の機関紙の名となっています。本当は10数名しか乗れない船でメキシコからキューバへ進んだのですが、途中、嵐になって、船から投げ出されてしまう人もいました。助け出せない状況なのに、皆で力を合わせ救出して島を目指しました。

しかし、バチスタ独裁政権の軍が上陸を事前に察知し、待ち伏せ攻撃をかけました。70人が殺され、残ったのは12人でした。その12人が、山の中から一人ひとりで農民を味方に組織して、ゲリラ戦で首都ハバナへと進みました。

### 「キューバ革命は

### 社会主義革命である」

フィデル・カストロはモンカダ兵營を襲撃しましたが、捕えられて裁判で陳述しました。そこで「歴史はわたしに無罪を宣告するであろう」と結びま

した。裁判では紙と鉛筆の所持を許されていませんでしたから暗記して、自分たちのやったことは正しいと陳述しました。それが文章化され「7・26運動」として人々に広がり、革命の指針となり、闘争を指導し、1959年1月1日ついにバチスタ独裁政権を打倒しました。

この勝利後、土地改革、農園・工場を国有化していくうちに、米ケネディ政権とぶつかり、1961年ビッグズ湾事件が起きました。これは米軍の支援下で傭兵が上陸を強行しようとした作戦でしたが、66時間で撤退させました。この時多くのキューバ人民が立ち上がりました。この事件を機にフィデル・カストロ議長は、「キューバ革命は社会主義革命である」と宣言しました。これ以降、土地の国有化、米企業の国営化など社会主義への道を進みました。ケネディ政権はキューバと国交を断絶しました。

## 革命58年のキューバ

革命後、どんなふうに変わってきたかということ。毎年7月26日、革命記念集会在、場所は違いますが、開催されています。今年、ピナル・デル・リオ州でした。この地方は革命前は最も遅れていた地域でした。農地の85%は、土地を耕さない地主の所有でした。乳幼児死亡率は、1000人



ゲバラ(左)とカストロ(右)

業率も革命前の30%から、ほぼゼロになりました。社会主義国、労働者が主人公の社会になれば、私たちは、いろいろなことを実現できるといふ具体例だと思えます。革命をゲリラ戦で闘った人、地下運動で闘った人もたくさんいましたので、そうした犠牲者を追悼する意味も含む革命記念集會です。

生まれたうち60人。平均寿命は53歳でした。ところが今は、乳幼児死亡率は1・7人。日本とほぼ同じです。それから平均寿命も男女合わせて79歳で長寿国となつています。医者も当時は非常に少なかったですが、今は医師医療スタッフ、フアミリードクターがいて、総合病院、専門病院が州にあります。ピナル・デル・リオ出身の医師は現在、43カ国で働いています。失業率も革命前の30%から、

## 社会主義世界体制消滅後の

### 危機を乗り越える

2014年12月にオバマ政権は、キューバと国交回復のための合意を発表しました。翌年の2015年7月には、双方の大使館が開設されました。それまでは、米国人はキューバには行かない、逆にキューバ人には亡命をそそのかすなどの敵対活動が続いてきました。

キューバにとって一番大変な時期は、貿易相手国だったソ連、東欧の社会主義世界体制が消滅したときでした。貿易市場の80%を失いました。米国からより厳しい経済制裁を受け、文字通り「社会主義か、死か」の生活でした。この危機をキューバ人民は楽観主義をもって苦闘し、乗り越えて社会主義を守りました。1989年〜91年の東欧・ソ連解体以前のゴルバチョフ政権時に貿易のドル決済を迫られ、社会

主義的ではない、経済政策がおかしいとキューバ指導部は認識していました。そのため世界の社会主義が崩れようともキューバ国民は「私たちは私たちの闘争を続ける」と決意して労働にはげみました。

90年代前半の困難な時期を克服し、地域諸国の連帯と統合への動きの中で米国の外交が回復しました。キューバ外交の勝利です。米軍事侵攻の可能性を脱したわけです。キューバ革命は国内だけではなく、世界中に共鳴する人たちが多くいます。

## 人間はいくらでも変わる

私が初めてキューバに行ったのは1971年で、その時キューバは、米州機構(OAS)という米主導の反共同盟に囲まれて孤立していましたから、西半球でメキシコ一カ国しか外交関係はありませんでした。日本から40人

ほどの青年が訪問しましたが、カナダ経由でメキシコ・シテイに降りて、そこからキューバに行く飛行機に乗り換えました。空港にはCIA要員がいて一人ひとり顔写真を撮られ、厳しかったのを覚えていきます。

砂糖キビ畑作業の体験を組織してくれたのは山本満喜子さんという女性でした。その方の善意がなかったらキューバには行っていませんし、私は22歳でしたが、キューバ革命を知ることもなかったでしょう。

1971年でしたが、キューバはまだ貧しく、暮らしは質素でした。しかし、困難な闘いを続けてきて現在は、他国の無医村地区にも医師を多数派遣する国になりました。キューバ人医師は、当該国の医者が行きたがらないところ、利害がぶつからないところ、交通の便が不便で、行くのに大変苦労するところ、あるいは、高い山や熱帯の湿地帯など自然条件が悪いところに

って、医療活動しています。

革命を通して人間はいくらでも変わるといことが分かります。日本で医者が自分の仕事を離れ二カ月、三カ月間、2000人、3000人という規模で災害地に行けません。しかしキューバは国家が医療制度を管理していますから他国への派遣が可能です。そういう制度と新しい人間、自分は何のために生きるのかを教える教育によって医療が支えられています。

1959年に革命が勝利した時、当時の医者は米国へ逃亡しましたが、残った数少ない愛国的、革命的な医者たちが残って、次世代の医者を養成してきました。こうして、中南米やアジア・アフリカ各地へ医師や教師を派遣できるようにになりました。今年は2017年ですから1959年から58年しか経っていませんが、ここまで来たということなのです。

## ◆みんなの学習講座

### ベネズエラ革命の現在

冒頭で、ベネズエラ政権はどちらの側の政権なのかを見定める必要があるといいましたが、現マドウロ政権は労働者側の政権です。軍人出身のチャベスが1998年12月に選挙で勝利し、大統領になって以来、新自由主義の残した負の遺産と闘い、石油企業を真の意味で国営化し、得た利益を貧し

い人々を助け、社会保障政策に還元させてきています。

1994年末にキューバとベネズエラの2国間で「ALBA代替計画」が合意され、ベネズエラからは石油、キューバからは医療スタッフと教師の派遣という相互補完的な協力関係がスタートしました。その後、この計画は「ALBAⅡ米州諸国民のためのポリアル同盟」となり、現在は地域の8



キューバ大使館にて。左二人目からベネズエラ大使、キューバ大使、ニカラグア大使。固い連帯のタッチ

カ国が加盟し、米主導の新自由主義的経済政策、米企業による搾取と収奪に対抗しています。

チャベス大統領は2013年癌で亡くなり、その後、マドウロ大統領がポリアル革命を引き継ぎ、現在に至っています。今年7月の制憲議会選挙で与党が圧勝すると、米政府は「独裁政権の選

挙は違法だ」と決めつけ、経済制裁を加えて攻撃しています。

今年の9月16日から19日、首都カラカスに60カ国から先進的な人々が集まり、「私たちは皆ベネズエラ…平和と主権とポリアル民主主義を追求する対話」世界会議を開き、米帝国主義の攻撃と制裁に断固抗議し、固く連帯していく「カラカス宣言」を採択しました。日本のキューバ大使館でも連帯集会があり、このカラカス宣言に連帯しようと、在日キューバ、ベネズエラ、ニカラグアの各大使が参加し、固く連帯の手を重ね合われました。(10月12日)

社会主義国キューバは世界の諸国民と連帯し、主権と平和を守るために帝国主義と闘っています。

司会Ⅱ今回で「社会主義は理想なのか 共産党宣言に学ぶ」を終わります。一年間のご愛読ありがとうございました。